

企画者の言葉

真の「臨床微生物学会認定医」とは：育成と今後の課題

企画者：上原 由紀（聖路加国際病院臨床検査科／感染症科）

原田 壮平（東京大学医学部附属病院感染制御部）

感染症学と臨床微生物学は密接な関係にあるが、感染症学に興味があっても臨床微生物学を修練しようという医師は多くない。日本臨床微生物学会認定医制度は、臨床微生物学と感染症検査法の進歩に呼応してこれらに関連する臨床検査の健全な発展普及を促し、実践し、指導と教育を行える優秀な医師を養成することにより、医療に貢献することを目的としている。臨床微生物学会認定医の育成と今後の課題について考える。

座長：笠原 敬（奈良県立医科大学感染症センター）

佐藤 智明（国際医療福祉大学成田病院検査部）

SY10-1

感染症専門医+臨床検査専門医+臨床微生物学認定医：微生物検査を学んだ感染症医の強み

荒岡 秀樹

虎の門病院臨床感染症科

学会のホームページや直接の問い合わせなどで調べたところ、感染症専門医は1554人、臨床検査専門医は602人、臨床微生物学会認定医は64人とのことである。日本の医師の人数が32万人余、循環器専門医14529人、呼吸器専門医7156人などと比較してみると、いずれも非常に限られた人数の専門医であることがわかるが、臨床微生物学会認定医は特に少なく認知度も高くないと思われる。微生物検査室では、検査結果が正式に臨床側へ最終報告される前の段階から、多くの情報を推定できている。医師として、微生物検査技師から多くの学びがある。検査の迅速化が求められる現在、微生物検査室の情報を正しく理解し、臨床現場でフィードバックできる橋渡し役を育成することが、最終的には患者の予後向上につながる。

感染症専門医や臨床検査専門医、あるいはそれを目指す若手医師をいかにうまく巻き込んでいくか、真の臨床微生物学会認定医とはどのようなものであるべきか、本シンポジウムで考えてみたい。